大安寺発掘調査概要

建造物研究室
歴史研究室

昭和41年9月、大安寺小学校の一部が改築されることになり、それに伴なう緊急発掘調査を奈良県文化財保存課と協力して行つた。調査を行つた地域は、大安寺金堂と講堂との間、4.5アールである。この地域は、講堂の階段が位置する場所であり、また以前この地域で認められる焼土層から唐三彩の破片が検出されており、今回それがさらに出土することが予想されたため、調査は主に金堂と講堂の間の改築地全面について行ない、さらに西側の鐘楼にかけては、幅4mのトレンチで発掘した。以下建造物遺構、出土遺物について概要を報告する。

遺　構

検出した主な遺構(第1図)は、講堂の南面階段と鐘楼の基壇まわりの地覆石などである。階段まわりは削平が著しく、粉粋された凝灰岩が散乱しているのみで基壇化粧は検出できなかつたが、前面の雨落溝と東側の出の溝が確認された。溝は側石・底石が欠損しているが幅80㎝、深さ20㎝である。階段の幅は、講堂中軸線から東側の溝まで9.2mあり、全長18.4mで講堂中央の三間分が階段幅となつている。階段の出については、講堂の基壇にとりつく入隅の部分が削平されているため確認できなかつたが、昭和38年の講堂調査で知り得た南面基壇線から溝まで約2.8mを測る。階段まわりには普通延石がめぐるから、実際の出は約2.6m内外と推定される。

講堂と金堂との間は平坦面となつているが、講堂階段より7.6mはなれ、伽藍中軸線上に掘立柱がある。柱は金堂と講堂間の約三分の一の距離にあたる。また、この平坦面上には厚い所で40㎝にわたつて瓦・土器を多量に含んだ焼土層が一面に堆積している。この焼土層は延喜11年(911)の大安寺講堂焼亡によるものであろう。

鐘楼については、昭和38年の調査で西側基壇の地覆石が検出されているが、今回の調査では北側の地覆石と東側及び回廊に接する入隅の部分の地覆掘り方を検出した。地覆石が遺存していたのは東北と西北隅及び北側基壇の西部分、また延石が東北隅に一部残つているほか他は完全に抜取られている。地覆石及び延石の幅は30㎝で、地覆の上には束石を立てる仕口(見付32㎝、見込11㎝、深さ羽目石の決りと同じ)がある。束石の仕口の中心より西側基壇の地覆石までの長さは3.62mある。基壇の幅は東西地覆の端で14.4mある。なお南北の長さは、南側が民家となつており不明である。基壇のつみ土は版築となつており、厚さも20㎝残つている。基壇の掘込み地業については、基壇外まわりの削平が著しく確認できなかつた。

回廊から鐘楼にいたるつなぎ廊の部分は、廊西側基壇の地覆石の掘り方が検出された。東側については凝灰岩の破片が認められるのみで完全に削平されている。

2　出土遺物

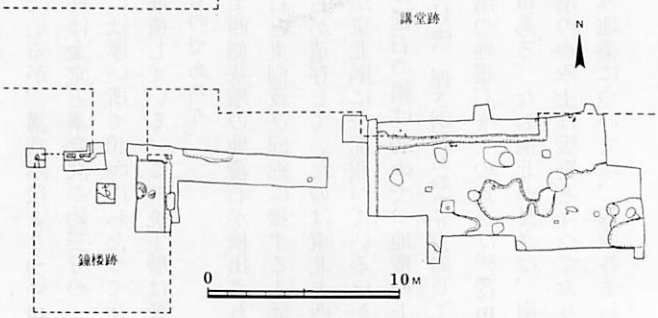
調査で出土した遺物は、唐三彩を始め施釉陶器、土器、瓦類、金属器など多数にのぼる。これらの遺物は、金堂と講堂の間に一面に堆積した焼土層の中から検出したものである。とくに講堂前には東西8m、南北3.5m、深さ50㎝の土壙があり、このなかに遺物が充満していた。これらの遺物は延喜11年の講堂焼亡に関係し一括投棄されたものと考えられる。

遺物のうちで注目されるものは、200点におよぶ唐三彩の陶枕類の破片、二彩釉の棰先瓦などの施釉陶器、瓦類である。これらの遺物は、火災によつて表面の釉薬が剝脱・変色をきたしているものが多い。我国における唐三彩の出土は稀有のものである。次にその主なるものを紹介する。

A、施釉陶器

唐三彩(第2図)はほとんどが陶枕で、表面に花文・唐草文・飛鳥文などを陰刻または型捺しを行ない、その間を緑・黄・白・藍釉などで彩つたものである。個体数にして30個以上が存在するが、そのうち全体の大きさがわかるものが数例ある。枕には大小2種類があり、(11)は小型のもので長辺12.4㎝、短辺9.5㎝、高さ5.7㎝、中央の高さ5㎝であるが、他のものもほゞ同様の大きさである。壁の厚さは0.5㎝内外で胎土は白く、非常に堅緻に焼成されている。また、大型のものは長辺が明らかでないが、短辺11.5㎝、高さ10.5㎝、壁の厚さ1㎝に及ぶものである。枕の上面は普通中央部がゆるやかに凹んでいるが、(1)のように上面及び側面の両長辺が内方に凹んだもの、また上面・側面とも平坦で直方体をなすものもある。枕は6枚の粘土板をそれぞれ接着して密閉の箱としているが、各板の接着には接着面に薄く粘土を置き押圧して密着する。各面の接着順序は、原則として短辺に長辺を重ね、さらに、上面・下面を接着する。箱の側面には必ず一ヵ所小穴を穿つて焼成時の破損を防いでいる。

文様は、上面に宝相華文・鳥文・唐草文・四葉文を陰刻または型捺し、その間を彩釉している。側面は三彩釉を施したものが一般的である。宝相華文は、(1)(2)の如く、向き合つた半パルメットの二葉の抱合せを一単位として、それを連続させて文様を構成するものと、(4)(5)(6)のように連珠・唐草文で構成するものがある。(2)(5)は藍釉を施してい



第1図　大安寺発掘遺構実測図

第２図　大安寺出土彩釉陶枕実測図

る。四葉文(7)(8)(9)は、四葉を市松風に型捺ししたものであるが、それぞれ四葉の大きさ、配色に多少の変化がみられる。(7)(8)は上面全面に四葉を捺しているが、(9)は上面の周縁幅1㎝を沈線で画し、内方に子辨をもつ四葉文を型捺しし、周縁は三彩釉となつているが、なかには四葉の子房・子辨・辨をそれぞれ黄・緑・白釉の配色で、四葉文の各間が緑釉になつているものもある。側面は三彩釉で彩つているのが普通であるが、(7)のなかには上面・側面とも四葉文を型捺しした例もある。(11)は多彩釉で、上面を沈線で3区に画し、内区を緑釉の単彩、中区を黄・白釉の二彩、外区を緑・黄・白・藍釉で彩つている。側面は黄・白の二彩釉である。(12)は上面の半分が欠損しているが、やゝ大型のもので長辺13.8㎝、短辺10.3㎝、高さ5.8㎝ある。上面はまた二次的な火を受けて釉が厚く融着しており、全体の文様の構成、彩色の状態が明らかでないが、側面は三彩の流斑文となつている。(3)は、二次的な火を受け釉が剝脱しているが、二羽の鳥が陰刻されている。二羽の鳥の頭部の間に花文をえがいているものもある。

三彩陶とともに絞胎陶の陶枕もある。絞胎陶は白土と赤土を練り上げ、表面に淡い黄釉を施したものである。(10)はほゞ全体の大きさが分るもので、長辺12.6㎝、短辺9㎝、高さ6.3㎝ある。中央がゆるやかに凹んでおり、上面には三彩釉の施文がみられる。なかには、上面が絞胎陶で側面が黄釉の単彩のものもある。

これらの陶枕の底部は原則として無釉である。

この他の施釉陶器には、唐三彩の壺の破片、国産のものでは三彩の壺、緑釉の四足壺・坏などの破片がある。

B、瓦　類

施釉の瓦類（第3図）では、二彩釉の棰先瓦・緑釉の丸・平瓦がある。棰先瓦は、地棰・飛檐棰の2種がある。地棰のもの(1)は、二彩釉で、直径15.5㎝、厚さ1.5㎝あり、淡い黄釉の上に濃い緑釉で蓮辨と周縁を表現したものである。中央に0.6㎝の釘穴を穿つている。飛檐棰のもの(2)は、復原すると縦14㎝、横13.4㎝の長方形で、上下2ヵ所に釘穴をもつ。表面は濃い黄釉の地に緑釉で周縁などを表現した二彩釉であるが、二次的な火を受けたりして全体の文様構成は明らかでない。これらはいずれも国産のもので、やゝ軟質である。

その他の施釉の瓦類では、緑釉の丸瓦・平瓦が若干出土している。

以上施釉陶器・瓦類について若干説明を加えたが、このほかの出土遺物には、青磁、須恵器、土師器、神功開宝、鏡片、ソーダガラス片、銅製品などのほか多数の瓦類がある。

第3図　大安寺出土施釉棰先瓦実測図

3 結語

我国における中国の彩釉陶の出土例は、宗像の沖ノ島祭祀遺跡[註1]でそれと思われるものの出土例があるが、確実な唐三彩が大量に発見された例は始めてであり注目される点である。

また、出土した彩釉陶の大部分が陶枕であることは、非常に特異な例といわなければならない。陶枕は唐代には小形のもので、宋代には長辺40㎝に及ぶ大形のものがあり、頭枕としての形態が定着する。我国における陶枕は猿投山古窯跡で11世紀の窯跡から数例が発見されている。[註2]いずれも大形のもので長辺が17.4㎝、短辺が10㎝、高さ8.4㎝あり、表面・側面に唐草・飛雲文が陰刻されている。これらは明らかに頭枕と考えられる。今回出土した小形の陶枕がいかなる目的のものであつたか、にわかに決め難いが、腕枕として使用されたものもあると考えられる。

第4図　大安寺出土三彩釉陶枕

註

(1)『沖ノ島』(宗像神社復興期成会) 1958年

(2)『愛知県猿投山西南麓古窯址群』(愛知県教育委員会) 1957年

八賀　晋)